近 代社会における反社会的行動の形成に関する一考察

F

済様式を下部構造とする近代社会においてはそれ等は複雑なる様相を呈して obligation — が存在し、 叉との社会的統制や社会的强制に対抗し、 現象を明らかにしようと思う。 ている。従つてこの小論の問題意識もこの点に存するわけであり、 や関係は時代や社会により色々の相異や変化を示しており、特に資本主義経 る個人の社会的行動 social behaviourが見られるのであるが、これ等の内実 成員に課せられる統制や强制―社会的統制social controlや社会的强制social 一断面を構造的に分析することによつて、 凡そ歴史上いかなる社会集団にあつても、 近代社会の内に生活する我々にとつてその生存に関する問題にまでなつ 近代社会の恒常的な、 しかも容易ならぬ数値を示す病的現象にまでな 集団生活を維持するためにその 近代社会におけるそうした病的 近代社会 反抗す

__

人間は集団生活を通してその生存を可能にする社会的動物であつて、原始人間は集団生活を通してその生存を可能にする社会的動物であつて、原始したなり、その習慣の束としてのパースナリティpersonalityを形成する。行動となり、その習慣の束として生れ、それ故に又動物と異つた学習能 カー 模 做をもつ生物的な個体として生れ、それ故に又動物と異つた学習能 カー 模 做をもつ生物的な個体として生れ、それ故に又動物と異つた学習能 カー 模 做をもつ生物的な個体として生れ、それ故に又動物と異つた学習能 カー 模 做をもつ生物的な個体として生れ、それ故に又動物と異つた学習能 カー 模 協 (を)

山 本 英 治

て重要な意味をもつているのである。 て重要な意味をもつているのである。 とればにナングが「人間のパースナリティの主要な特徴は、普通五才以これについてヤングが「人間のパースナリティの主要な意味をもつているのである。 これについてヤングが「人間のパースナリティの主要な特徴は、普通五才以これについてヤングが「人間のパースナリティの主要な特徴は、普通五才以

行動や社会関係の変化が集団の変動をもたらすのである。 の社会集団そのものの創造発展が個人の創造的な社会的行動となり、それ等が社様式に基づく生活欲求の充足行為―この二つの欲求の充足行為が人間をして様式に基づく生活欲求の充足行為―この二つの欲求の充足行為が人間をして様式に基づく生活欲求の充足行為―この二つの欲求の充足行為が人間をしてしたりである。即ち人間の生得の欲求とその集団において獲得した行動へは会議である。 の社会集団とのように一方的に社会によつて形成されるのみならず、そしかし人間はこのように一方的に社会によつて形成されるのみならず、そ

欲求充足のための自発的な社会的行動の結果であり、そして、それは生産力成される社会関係や社会集団なのである。此の社会関係や社会集団は人間のgroup のようなものは、特に人間の自発的積極的な欲求行動に基 づいて 形つて示唆され、今日のアメリカ社会学者達の言う第二次的集団 secondary 例えばテンニースの所謂ゲゼルシャフト Gesellschaft、或はクーリーによ

上部構造が逆に下部構造に作用して、 産関係と矛盾する所に生ずるのである。 急速に変革される」とあるように、 力の発展形態からその障害にかわつてしまう。こうして社会革命の時 的表現にしかすぎない所有関係と矛盾するようになる。これらの関係は生産 生産力がこれまでそのなかで運動をしてきた現存の生産関係、 展によるのである。「社会の物質的生産力はその発展の一定の段階で、 めざるを得ない。そしてかかる社会関係の変化は根本的にはその生産力の発 社会的存在が彼らの意識を決定する」と言つていることを我々は原則的に認 を制約する。 台である。物質的生活の生産様式が社会生活、政治生活、精神生活の過程全般 的な上部構造がたち、そして一定の社会意識形態がそれに照応する現実の土 総体は社会の経済構造をなしているが、これはそのうえに法制的および政治 力の一定の発展段階に照応する生産関係にはいりこむ。これらの生産関係の ならないのである。 そして更には、 一定の、必然的な、彼らの意志に左右されない関係、すなわち物質的生産 之は社会的人間の創造的行動によつて支えられていると言うことであ この「生産力の発展」は人間から遊離した単なる物質的なものでは 経済的土台の変化とともに、 係にもとづく 人間の意識が彼らの存在を決定するのではなくて、 即ちマルクスが「人間は彼らの生活の社会的生産 この下部構造が絶対性を有しているものではなくして、 生産関係によつて根本的に規制されている、 現実の社会変動は生産力の発展がその生 巨大な上部構造の全体が徐々にまたは その発展の動因をつくると言うことで しかしてこで誤解されてはならない またその法律 逆に彼らの と見 代がは 生におい 20

ると共に逆に社会を創造する」という循環的発展の関係にあるのであつて、 互関係にお 反覆された結果、 は両者の相互関係 ならない。 たように、 いて見られるのである。 これから述べようとする社会的統制も、 個人と社会の関係は、 固定化し、 inter-relation, それが集団の行為様式--社会制度 social 即ち集団に所属する成員の社 mutual relation 「個人は社会によつて形成され においてとら かかる両者の

> とその統制や强制を尊重すると言うことになるのである。 のusness — そうした意識はその集団が成員の生活欲求を完全に満す場所であのusness — そうした意識はその集団が成員の生活欲求を完全に満す場所であて更に各成員がその集団の存続を計ろうとする意識が集団意識 group cnsci_ て 及成員を拘束し、又成員はこれを行為規範として受け入れるのである。そしとその統制や强制を尊重すると言うことになるのである。

規定、 つて、 できぬ場合には、 それを無効にし、 また特別な苦痛を課することによつて、 てはどうであろうか、公共意識は、 れば、私の行為を中絶せしめ、行為が完了し、しかも回復しらべき場合には て犯そうとするなら、それらは私に対し反作用して、 するや否や、それは自己を顕現するのである。 特質でないということにはならない。その証拠に、 は、その要がないから、私に感知されないか、 されている。もちろんこの强制は、私が充分快ろよくそれに服従する場合に とに拘はらず、個人を制肘するような、一種の命令的、 は、ただ単に個人に対して外在的だというばかりでなく、個人の欲すると否 と言うような意味の事を述べ、更に、「このような行為、或いは思惟の類型 の様式 manieres d'agir, de penser et de sentir が人間の外部に存在する」 しそれが存在しないわけではない。 を抑制する。 かである。けれどもそれだからと言つて、この强制がこれらの事実の内在的 では、このようにして形成された社会的な統制や强制とは、 し私が私の国、私の階級の慣例を無視した服装をするならば、 人が私に向ける嫌悪は、 道德規範、 いつたい如何なるものであろうか。それについてデュルケムが その他 私にそれを賠償せしめる。では単なる道德的諸規範にあつ 且つ常態に復せしめ、行為がいかようにも回復することの 宗教教義、 の場合では、 かなり緩和された形においてであるが、本来の意 金融制度等々のような行為の、思惟の、また感受 拘束 contrainte 諸市民の行為を監視することによつて、 もし私が世間 道德的諸規定に反する各個人の行為 もし私が法律の諸規定を敢え 或いは感知されても極めて僅 の習俗に従わないならば、 私が抵抗を試みようと は一層强くないが、しか それが適当な時機であ また强制的な力を賦与 私の招く嗤 般 的 「法律 ĸ

苯•

「近代社会における反社会的行動の形成に関する一考察_

要求に応ずるのでなければ一般に存続しえない」ということにある。 即ち事実がそうであるように―もし何事かに役立つのでなければ、即ち何らかの 强要することの出来る一種の强制力」なのである。そしてこの强制力の存在は「行為、思惟、感受の様式から成立していて、個人に外在し、且つ個人を 場合でも、 味の刑罰と同一の諸効果を生ずる。なほまた拘束は、それが間接でしかない 强制力は、 の意義は、 物論の立場から言へば、法律や道德は階級的なものであつて、一場合に、歪んだ適応形態をとつた極端な場合であるとも言える。 において獲得したパーステリティが集団生活をするためには不適応性を持つ conduct として現われるものもあるし、 によつて抑制されて満されない場合に、その欲求充足の補償行為 conpensate restraintが生ずるわけである。即ちこの拘束を無視する人間行動と言うもの 拘束に反する人間行動も存するのであり、 よつて集団生活をする成員の行動が拘束されるわけであるが、又この社会的 員のある行為に対しての「命令」であり、それにも事前的なもの として は としては「懲罰」が行われるのである。他は積極的方向と言われ、 す。それには事前的措置としては「予防」と言う方策がとられ、事後的措置 は消極的方向と言われるものであり、 応じたものなのである。更にこの强制は二つの方向をもつている。即ち一つ にこの拘束の最も强烈なる形態である法律を無視する行為―犯罪― 時に応じて積極的な反抗的行動となつて現われる、と見ることも出 支配階級―によつてつくられた社会制度は、 「奨励」があり、 大なり小なり重圧として意識される。従つて彼等はそれに抵抗感を抱き、 いろの犯罪学説においては、 面から見れば彼の生得の欲求と社会的に形成された欲求が社会的拘束 集団に所属する人間の生活を保障し、安定させようと言う要求に それ故に効果が少ないとは限らない」と言つており、 デュルケームが言うように、 事後的な措置としては「表彰」がある。そしてこの方向に 一生物学的条件を重視する考え方としては これは成員のある行為の「禁止」を示 「すべての生命の事実は―道德的諸 又 他面から見れば、 そこに事後的な措置としての制裁 他の階級に属する人々にとつて 一つの 第一次集団 叉 それは成 「来る。 に関する 局それ 史的 更

> な犯罪説がある。 していイフロイディ 件を强調する考え方があり、 ルクシズムの立場に立つ見方がある。 (1)特に人類学的定型を强調する説、 ズムに依る説、 臼社会的条件を强調する考え方としては特にマ 四アドラーの個体心理学説、 印遺伝学に拠る見方、 巨心理学及び精神医学における立場と パ個人の身体的条 い動力学的

れぞれの時代の、 社会に限定して問題を展開しようと思うのである。 それに基づく人間行動としての制度や意識を追求せねばならないのである。 との関係を研究せねばならない。即ち歴史的に社会集団の経済構造を分析し る法律体系、政治制度及び社会意識形態—イデオロギ—」を、更には他の集団 これを歴史的社会的現実においてダイナミックにとらえんとするならば、 この小論においては歴史的な考察を、「序」において述べた如く、 に対抗する行動」についての論述は飽くまでスタテックな原理論であつて、 しかし以上述べた「パースナリティの形成」、「社会的な統制や强制及びそ それぞれの集団の「生産力及び生産関係、その上部構造であ 一応近代

- (1) 社会集団と言つても無数にあり、 と機能的集団、又前近代集団と近代集団のような分け方もある。 とゲゼルシャフトGesellschaft に分け、アメリカ社会学では第一次集団 なつて来る。例へばマッキーバーはコンミュニティー community とアソシエー groupと第二次集団 secondary group に分類している。 association に区分し、テンニースはゲマインシャフト Gemeinschaft 従つてその分類基準如何に依つて集団類型も異 その他に基礎的集団
- (4) (3) (2) E, Fromm, The Fear of Freedom, PP.25-26
 - G.Tarde, Les lois de l'imitation, 風早八十二訳、「模倣の法則」
- J.Dewey, Human nature and conduct, part three, The place of intelligence in conduct
- R. Linton, The cultural background of personality, IV Personality
- K. Young, Social psychology, P.
- H. Cooley, Social organization P. 23

(8) (7) (6) (5)

- K. Marx, Zur Kritik der politischen Okonomie, Vorwort, S. 54
- ibid., P.

(9)

Щ 大 学 紀 要 経 済 学 部 論 集

- Linton, The cultural background of personality, PP,10-11
- (11) (10) 学的方法の規準」四七―四八頁 E'. Durkheim, Les R'egles de la me'thode sociologique 田辺寿利訳' 社.

会

日

- (12)同訳書、四八—四九頁
- (13)同訳書、四九一五〇頁
- (14) E'. Durkheim, De la Division du travail social, 田辺寿利訳、 「社会的分業
- エンゲルス著、 栗田賢三訳、 「反デューリング論」一五八―一五九頁
- (16) (15) 松村常雄著、 「犯罪心理一、 岸本鎌一著「犯罪原因に於ける遺伝と環境の問題」

そこに見られる病的現象を説明しようと思うのである。 会における「パースナリティ」と「社会的な統制や强制」 この節においては、近代社会の性格と構造を分析することによつて近代社 の問題を展開し、

な土地貴族に対する手工業者や農奴的農民の階級斗争を通じて発展したもの 胎内で成熟した新しい生産力と封建的な生産関係との矛盾―によつて封建的 社会である。即ち近代社会は封建社会内部における経済構造上の矛盾―その と同意義に解されているように、市民革命―ブルジョア革命―(一七―一九 「見えざる神の御手」invisible hand によつて導びかれる商品生産を行う社 近代社会は一般的に「市民社会」civil society, burgerliche Gesellschaft によつて成立した所の資本主義経済様式に基づく自由にして開放的な 身分的差別や地域的封鎖から解放され、人間は自由な個人として

り上げ、益々その階級分化を進行させ、その対立を激化するのである。 代社会においては「生産手段の所有者と非所有者」と言う経済的に不平等な 会においては、 達の過程は新しい二つの階級―ブルジョアジ―とプロレタリアートーをつく ところが注目されねばならないことは、この資本制生産様式の発生及び発 それは「身分階級」 ständische Klasse であつたもの 封建社 が、近

> 隷制社会以後の歴史)と言うように、それぞれの社会の歴史は階級斗争の歴 社会の歴史とは、 史なのである。 (法的には平等とされつつも)階級となつたのである。そしてマルクスが まで の あらゆる社会の歴史は階級の闘争の歴史である」(但しあらゆる 「原註」にもある通り、文書をもつて伝はつて来た古代奴

あつて、 利益が得られないならば、都合次第で何時でも労働者を解雇する。だが労働 なかつた。「労働者はすきなだけ何度でも自分が雇はれている資本家のもと 原理は人間の自由と平等であつた。しかしこれは飽くまでも法の前のそれで 生きるために彼等の労働力を切り売りせねばならないのである。市民社会の ある。何故に彼はそれを売るのか?生活するために」。プロレタリアートは ている。「だから労働力はその所有者たる賃労働者が資本家に売る一商品で てその労働力を売らねばならないのである。即ちマルクスが次のように言つ 有されるに対して、生産手段から分離された農民と手工業者は賃労働者とし 働者を労働者として育て上げるために必要とされる費用である」。この結果 するのである。 すなわちこの資本家階級において一人の買手を見出すことは彼の 仕事 で あ には、資本家階級を見棄てることはできぬ。彼れはあれこれの資本家には属 力の売却を唯一の生計の道とする労働者は、 を去り、また資本家は、もはや労働者から何らの利益も得らないか、 そして資本制生産様式の特色は利潤の追求にある。この資本蓄積のためには の労働力によつて生み出される剰余価値によつて益々富裕となるのである。 プロレタリアートは益々窮乏に陥入るに反して、ブルジョアジーは、労働者 労働者に対してその労働を補償するのではなくして、労働の価値だけを補償 ジーに必然的に隷属せねばならないのである。しかも資本家は労賃によつて る」とマルクスが言うように、ここにおいてプロレタリアは、ブル ジョ ア しないが、併し資本家階級に属する。そしてその際、自分を片づけること、 ブルジョア革命の結果、資本を蓄積した産業市民階級の手に生産手段が 現実には一般大衆にとつては経済的不自由と不平等以外の何物でも 即ち「それは労働者を労働者として維持するために、また労 自分の生存を断念することなし 予期の

「近代社会における反社会的行動の形成に関する一考察

義にとつてそれ自体解決の出来ない矛盾に追い込まれた状態なのである。 済及び政治の支配的な力となり、世界を自己に有利にするために、 う矛盾を含んでいる。 赤裸々な利害以外の、即ちつめたい『現金勘定』以外のどんなきずなをも残 次世界大戦がそれである。このように過剰生産恐慌と帝国主義戦争は資本主 世界の再分割を計り、帝国主義戦争を惹起する。即ち第一次世界大戦、 義時代に金融資本が形成され、 上昇線が下向線にとつてかわつた帝国主義時代に强く現われる。この帝国主 ために又商品の需要が減少するのである。 行われていると同時に、生産手段に対する私的所有が保持されている さなかつた」。しかも資本主義経済社会は基本的には生産の巨大な社会化が に発達すればする程、この恐慌が頻繁に襲来し、恐慌と恐慌との 間 この時には多くの企業が停止し、 人間の生命が犠牲 恐慌そのものが破壊的となる。そしてこれが特に資本主義発展の そしてそうした矛盾は先ず恐慌となつて現われるので にされているのであ 金融寡頭制が支配するようになり、 数百万の労 働 そして、 る。 資本制生産様 式 人間 者が失業 と人間 との 軍事的に それが経 あ が が V その 第二 増み 高度 とい だ

都市が形成される。即ち前近代社会は村落的社会形態が支配的であつたに対 れて人間の生活は社会的にも個人的にも分化 ける人間は自由にして平等な個人であると言うィデオロギーによつて、 と通信の発達となり、その結果地域的封鎖を打破することになる。 経済構造の矛盾から発展した資本制生産様式は商品市場の拡大、従つて交通 次に以上述べて来たような生産関係にもとづいて形成される近代社会の政 階層的にも地域的にも自由に交流し得る開放的な社会となる。 はその欲求に応じて自由 近代社会は都市的社会であると言える。 法律体系、意識形態、即ち近代社会の上部構造を見よう。封建社会の 生活を社会的にも個人的にも生活が分化した都市的な社会基盤の 移転の自由、結社の自由を通して人々を身分的差別から解放し かかる商品生産社会としての自由な開放的社会構造の内に 集団を創造し、 division して行き、 このように近代において人間 それに参加 叉それか 近代的な **とこにお** それにつ 自由 ら脱

> 自己の人格の統一的な行動を行わんとしている。 コンプレツクスから成つているのであり、 ては未だ実質的にはこの体制が支配的である。このように近代社会は集団の だ大きな力をもつている。特に完全な市民革命を経なかつた日本社会におい のではなく、広く前近代的集団の形態が残存し、しかもその制度や観念は未 である。しかし近代社会的においては前近代的な集団が全く消滅しているも ŀ 会集団 functional social group 第二次集団 secondary group ゲ 活欲求の凡てを満すことは不可能であつて、 一次集団 primary group、 場合のように一つの集団―基礎的社会集団 fundamental social group 、 退することが出来ると言われる。 Gesellschaft — の内に已れを分化させて参加し、 ゲマインシャ フト 即ち近 代においては、 かかる集団の交錯の内に近代人が 人間が創造する集団 Gemeinschaft 一の内にその生 その欲求を充足するの 人間は前近 ゼ ルシャフ

人間は非合理的な逃避を求めるようになる。 は社会及び個人の分裂 disunion となり、近代社会の合理性は否定せられ、は社会及び個人の分裂 disunion となり、近代社会の合理性は否定せられ、然しその資本制生産様式の諸矛盾の結果、社会及び個人の分化 division

雇用 うまでもない。 る水準にまで引下げる」と言つている。ここで明らかであることはブ義なくせしめるのである。即ちエンゲルスが「また賃銀を資本の要求 雇用されていても資本主義体制を維持することのために自己の生産 タリアートの窮乏である。 発達すればする程、 B 労賃の引下げを生ぜしめ、賃富の差を増々大きく資本家への絶対的隷属を余 し、それは又ブロレタリヤの増大を意味し、労働力供給を過剰にし、 生産に必要である賃銀 先ずブルジョアージとプロレタリアートの二つの階級的分裂が資本主 3 かくて一 軍を形成している。 それに必然につづく恐慌のときには衝路に投げ出され」て産 方の富の蓄積は、 「それは資本蓄積に昭応した質困の蓄積という事実を生ぜし 益々行われ、そしてかかる生産様式は人口の増加 一低賃銀を支払われるのみであつて、 即ち労働者階級は常に失業の不安にさらされ、 更に彼等は「産業 同時にその反対極における、 界 が好調に動いている時には その貧困は言 即ち彼自身の 力の ブロ そこに 小に適す を可 が

及び道徳的堕落の蓄積である」とマルクスが言つている。生産物を資本として生産する階級側における、質困、労苦、 ャフトの組識はあたかも機械のそれのようであることがその機能を遂行する アートに属している―は如何なる制度や意識の内にあるだろうか。資本主義 て行動することを要求されるからである。即ち現代はメカニズムmechanism 資本家の下におけるプロレタリアの労働はこのビュロクラシーの部分品とし 参加せしめ、その集団の目的に従わねば生存が出来ないのである。何故ならば 事を要求する。そして現代では人間はこの機械のような集団に自己の一部を らない。そしてそれは人間の愛情や憎悪を初め非合理的要素を一切排除する の全生活のうち集団の目的に直接関係を持たぬ一切の要素を捨て去らねばな は限りのない営利追求と言う合理精神の現われであり、従つてそのゲゼルシ る経済的不安のもとに置かれた一般大衆―現代では殆どの人々はプロレタリ 品として集団に参加することによつて自己の生命の保存を計らねば の時代である。結局人々はここにおいてその全体性を失つた所の機械の部分 近代社会は一応いろいろの自由を獲得したが、結局それは未だ人間に幸福を の分裂或いは衝突となる。 自己を分化してその一部を委ねる個人にとつても、 義の経済構造上の無政府状態から生じたこの機械的な諸集団は相互に調和と 第に失いつつあると共に、可成り第二次的集団化しつつある。しかも資本主 近代社会においては基本的な家族集団すらもその多面的な機能を歴史的に次 か。前近代社会では基礎的集団―特に家族―においてそれが可能であつたが い。ではこの失われた全体性の回復を計る集団が現代では存しているだろう において要求せられる。即ちここに広い意味のビュロクラシーbureaucra ・に基づく機械的な集団が出現するのである。 たらさなかつたとも言える。 そこにおいて人間は自己の統 以上述べたように近代社会においては社会と個人の分化が分裂と 分裂し、衝突を生じている。かかる無政府状態にある諸集団に 所謂忠誠の衝突 conflict of loyalities を生ずる このことについて、 一性を保つ努力が課せられている。 此のビュロクラシーは それは同様に自己の内面 フロムが 隷属、 現実においてかか 「近代人は個人 無知、 ならな 人間 暴冈 即ち

> 択一に迫られる」と言つている。 間の独自性と個性とにもとづいた積極的な自由の完全な表現に進むかの二者ある。彼は自由の重荷から逃れて新しい依存と従属を求めるか、あるいは人い。自由は近代人に独立と合理性とを与えたが、一方個人を孤独におとしいい。自由は近代人に独立と合理性とを与えたが、一方個人を孤独におとしいい。自由は近代人に独立と合理性とを与えたが、一方個人を孤独におとしいい。自由は近代人に独立と合理性とを与えたが、一方個人を孤独におとしいい。自由は近代人に独立と合理性とを与えたが、一方個人を孤独におとしいい。自由は近代人に独立と合理性とを与えたが、一方個人を孤独におといいたのでは、一定になったが、個人的自我の実現、すなわち個人の知的な、感情的な、またに安定をあたえると同時に彼を束縛していた前個人主義的社会の絆からは自己を定める。

能力における個人差と内分泌と関係があるとされている気質―の上にその家間はその先天的遺伝的基礎―先天的な生理欲求といくつかの先天的な知覚の 生産様式にもとづく階級性によつて根本的に規制される。即ちプロレタリア 団に所属する事によつて全体性を喪失するのみならず、内面的な分裂葛藤を ートにおいては彼等の生活は常に不安であり、 inferiority complex を抱きながら、一方その家族関係において支配力をも ロレタリアの日常生活とは、例えば絶へざる経済生活の貧困、従つてその幼 族の日常の生活様式を学習し、又それを習得するように强制される。即ちプ 生じている。このようなプロレタリアの家族集団の内に運命的に出 めに両親を失い、家庭環境がいびつになることがある。 形成は素直でないことが多い。更に帝国主義的資本主義にもとづく戦争のた つている大人が既に人間性の全体性を失い、分裂葛藤の状態にあり、叉教養 少年時代は常に物質的な欲求の不満を感じ、又他の持てる者に対する劣等感 への機会を失うことが多いから、幼少年の家族内におけるパースナリテイの かかる複雑な近代社会においては、 人間のパースナリティの形成は資本制 **貧困である。更に機械的な集**

級意識にもとずいている。このように近代市民社会の社会的强制の特質は資るところの社会的諸関係の体制(または秩序)規範である。即ち法意識は階階級の利益に応じ、それ故にその組織された権力(国家)によつて維持されと意識は彼の保存のためにつくられ、存在している。例えば、法規範は支配ところで近代社会における支配階級はブルジョアジーであり、多くの制度

社会において根本的だと思われる立場を述べて見る。 と説があり、どの論にも一応夫々正当性が認められる。 が見られるのは何によるのか? せねばならない。 多くの他の諸制度はより幸福な、 本家達が自己の立場を守り、自己に利せんがためにつくつた所にあるとも極 ない。しかし凡ての社会的な統制や强制がそうであると言うのではない。 **われわれはこのような社会的統制や强制は、正当に尊重し厳格に遵守** 従つてそれは一般大衆の利益に反する所が大である事は言うまで だが現代において社会的な統制や强制に反する幾多の行為 それについては、 そして安定した集団生活を保障するために 前にも挙げた通り、 しかしここでは近代 色文

がある。 な人間性の育成に向わないで却つて人間性の分裂を助長している。 るわけである」とリードが言うような状態にある。今日の教育は子供の素直 いる。とうして、我々凡ての努力は社会の分裂をつくりだすために費されてい い機会を与えられている。が、その攻撃本能は他の子供たちに向けられてい 育はその一面を見ても「我々は現在の教育によつて我々の子供達を競争の激 要な役割を占めていることは見逃されてはならない。教育は人間を「現実に は結局家族や資本主義の問題に関連するのであるが、教育がそれの形成に重 の根本的な問題はパースナリティの形成についてである。と言つても、 ており、 た形につくり上げられ、又そのパースナリティ及び社会は分裂に追い込まれ 失業の危機に曝されており、しかも彼等のパースナリティは時には歪められ たない労働力は不必要である。 しく適応 adaptation 」させるために行われるものである。 い分裂した社会に適応させようとしているのである。攻撃本能はすばらし 前述した如く、資本主義経済は慈善事業ではない。彼等の商品生産 席次と成績と進級のために休むことを知らない斗争が続けられている。 我々は人間に差別をつけるために―分裂させるために教育を行つて 既にここに社会的な統制や强制に反抗する契機が存在する。 更に彼等を拘束する社会的强制のうちには彼等の利益に反するもの プロレダリアートは常に貧困に追い込まれ、 所が現代の教 に役立 こ れ

のように近代社会においては、 山本●「近代社会における反社会的行動の形成に関する一考察 人々は経済構造の矛盾から、 或い は 教育

> 義の上昇期の場合とは比較にならぬ程の数量をもつて現われる。 がある。それは特に例えば社会の秩序や道徳の変動期にみられる。即ち近代 社会においては恐慌や戦争の後などには、前近代社会における場合や資本主 人はその歴史的社会的諸条件により、現実にそうした反抗的行動に出ること の誤り等から社会的な統制や强制に反抗する要因が与えられている。

究しようと思う。 次にこの社会的な統制や强制に反抗する行動の実際的なケースについて研

「市民革命の構造」及び、 「近代社会成立史論」参照

(2)

- K. Marx, Der Historische Materialismus, herausgegeben von S. Landshutu. J. P. Mayer, I, XII. Manifest der Kommunistischen Partei, S. 575,
- マルクス著長谷部文雄訳、 賃労働と資本。四二頁
- 同訳書、四四一四五頁

同訳書、

五三頁

- 同訳書、六二頁
- K. Marx, Ibid., S,578
- (8) (7) (6) (5) (4) (3) 福武直、日高六郎共著、「社会学」PP. 309―310階層的には垂直的な移動、 的には水平的な移動が自由になり、社会の流動性をたかめる。 地域
- エンゲルス著、 大内兵衛訳「空想より科学へ」五五頁

之については、清水幾太郎著「社会心理学」、第四章、第一節、集団への逃避、参照

- (13) (12) (11) (10) (9) 同訳書五五頁
 - マルクス著、 「資本論」、改造社版、 第一卷六三四頁
- E、フロムは之れを「自由からの逃走」の中で mammoth organizationと言つて
- E.Fromm, The Fear of Freedom, Foreword,
- (15) (14) ibid., PP13-14
- R, Linton, The cultural background of personality, P.84
- この気質なるものは後天的要素と厳密に区分されない。
- H.Read, Education for peace

(17)(16)

- 「平和のための教育」、
- Dewey, Human Nature and Conduct, P.64

=

校卒業。 れて日頃の小使銭の不足を補わんとしてこの行為に及んだのである。 持つていなかつたが、朝鮮戦争による特需のために生じた金ヘン景気につら 達は皆虞犯少年で窃盗行為の前歴をもつていた。彼は今までそうした前歴を と言つた方が適切である。そして学校の成績は中の下である。更に彼の友人 に風波がたつている。 胎生期間中その母親は特にそれに苦しめられた。 取りで非常に我儘な所があり、 (五千円) のみ。従つてこの少年は常に小使銭不足と言うより、 母は又身体虚弱であり収入は僅かの賃仕事 を窃取した十三才の少年がいる。 占 祖父母と母のみで父は九才の時に病気で死んでいる。 年に三人の友達と一 祖父は病勝ちで、 よく嫁いじめをし、 緒に某会社倉庫よりグラインダー 寝てばかりいる。父も母も共に小学 先ず、この少年の家庭環境 この祖母のために常に家庭 孫を可愛がらない。 (月二千円) と生活扶助 祖母は婚 全く無い 板 を簡 一時 彼の n

いと推察される。 い状態に置かれていた。しかも家庭内の教養水準は普通、 ために家族内の平和は常に乱され、 プロレタリアであつた。 悪条件をもつていた。 彼はその胎生期間中に既に、 響するからである。 こんな環境に置いては子供の素直なバースナリティの形成 即ち母体の精神的条件も、 九才迄は両親があつたのであるが、 そして彼が生れて来た所の家族は言うまでもなく 極く僅かであるが、そうした行為を惹き起す 特に彼の最も愛着する母親が暗い苦るし 肉体的諸条件と同様 或いはそれより低 祖母の 封 7建性の ĸ 胎

> ており、 つた混乱状態に置かれていた。このように分裂した、 のみならず、 を維 挙げた諸要因によつて彼の窃盗行為が現われたものと思われる。 プである。、従つて次に彼のとる行動が何であるかは容易に推察出来る。 しか持たないこの少年が遊戯集団として入つて行つたのが虞犯少年のグル 持することに全力が費されていた。 彼の人間性を豊かにする筈の教育が却つて彼を分裂させている。 彼は学校の成績は中の下であり、 従つて彼の この点に劣等感を抱かされ しかも不充分な価値 人間 性は全く分裂し

そ

次にかかる虞犯少年の家庭環境を統計的に調べて見よう。 先ず両親の有無についてみるならば、

% 49.4 17,266 14,834 43.1 36.7 22,166 33.3 22,451

(警視庁) そ の 外 の 不規則家庭 8.521 6,397 8,137 7,487 3,645 35.6 10,243

% 50.6 56.9 63.3 66.7 64.4

を示しているのであるが、

ある者も多く、

しかもそれが毎年増加の傾向

これは前

に述べた

表に見られるように虞犯少年のうちに

は両親

ように、

その家庭や教育や資本主義的市民社 々の缺陥によるものであることは言

会等の諸

事 Ø 第二表によれば、 が判る。 合に少年の犯罪 は次に両親のうちのどちらが缺け 即ち父がなくて、 父親のない者の犯罪 が多いであろうか。 が母 く

第2表

又社会における多

その

日

つて祖父母及び母は彼に家庭教育を行う余裕は全くなく、

価値体系の混乱から彼に統

一ある価値を与える事が出来す、

|括の基底である経済的支柱がより不安定になつたのは言うまでもない。

凡ての経済生活は不安定な時であつた。

この頃は敗戦で日本社会は未だ秩序や道

母は少年に対して甘くなつた。

父が

も頽廃混乱しており、

死んだのは昭和二十三年である。

は望まれない。

そして父が死んでから、

少年刑法犯警視庁檢舉

従つて彼の

(昭和26年上半期)	
両親のあ るもの	6.59864.4
両親のな いもの	901 8.8
父のない もの	1,53915.0
母のない もの	657 6.5
継父母	33 0.3
実父継母	316 3.0
継父実母	118 1.2
養父母	54 0.5
戦災弧児	27 0.2
āt	10,243 100

第1表 少年(刑法犯)家族状况

両親ある者

8,745

8,437

14,029

14,964

6,598

昭和22

23

24

25

26

ない者の場合に比して二倍半もあると言う 養育が難しいことを示している。 母のみによる子 親

7

る

うまでもなかろう。

第4表

昭和11

12

13

14

15

16

1.7

18

19

20

21

22

23

24

25

20才未満(刑法

犯)検挙人員

(国警本部)

検挙人員

46,550

46,046

48,933

48,367

53,048

52,709

66,588

61,366

75,314

54,787

117,790

104,829

158,426

124,836 268

131,916 283

数指数

100

105

114

143

131

161

118

240

223

99

上 流

Ħ 流

下 流

極 睝

に昭和

十 一

年に比

して昭和

二十五

年

は

実

rc

計

昭和23年

110

5,277

8,660

14,834

787

% 0.8

35,6

58.3

5.3

% 0.9

35,1

55.2

8.8

昭和24年

201

7,772

12,243

1,950

22,166

罪少年の生活状態

している。

との両者を合せると実に九二・二%─昭和二十六年上半期

その犯罪の殆んどが中流と下流

K け

達する。

に犯罪少年の生活状態

rc

ついては第三表の

通りである。

日本社

会に

お

構成の実数は正確には判らないが、

(警視庁検挙人員) 昭和26年 上 半 期 昭和25年 % 0.8 % 0.6 124 82 7,311 32.6 3,562 34.7 12,982 57.8 5,882 57.5 2,034 9.0 741 7.0 22,451 10,243

社員九%、 四%、次に自由労務者が十二%を示し、後は会 労務者とを合せると全体の二二%となり、 公吏二・八%となつている。 めている) 和二十六年上半期 店員八%、農業七%、職 一無職 即ち工員と自 人五%、

たのではないと思われる。 うに変つたかを第四表に見よう。 して、 が上らなかつたためで、 た第二次世界大戦の結果、 に日本資本主義と失進欧米資本主義の惹起し 犯罪現象が生ずるかを知ることが出来る。 終戦時の実数が少いのである 終戦直後の混乱のために、 いかに多くプロレ 決して犯罪が減少し タリアートにかかる とにかくこのよう 犯罪現象がどのよ それによる 検挙の実績 が、 然しそ 솘

更に犯罪少年の保護者の職業を見ると―昭 を除いては工員が首位にあつて十 (全体の二〇%を占

0

温床をつくるのである。

前 官 由

と思う。

大きな課題

で あるが、

ここでは若干の気づいた点を指摘するだけに止めよう

今後において益々一層研究されねばならない

は非常に困難な問題であつて、

や强制に反抗する諸々の行為の解決は如何にして求められるであろうか。

ではこうした犯罪現象及びその他の社会的な統制

述の中流と下流の九二・二%と共に、 他 に比 由 進 (1) (3)(2)

つて、 四 資本主義の矛盾の一つの現われである。 倍 の犯罪 少年を 出してい る。 これは正し しく戦争 の結果の 病 的 現

階において戦争を惹起し、 に行為がプロレタリアートに数多く発生し、 Ĺ の統計表に見られるように、資本制生産様式の構造的矛盾によつて、 そこに社会の無秩序と混乱を生み出し、 しかもそれはその帝国主義の 犯罪現 象で

狚

あ

ないのである。 anging human nature 家へ」と進むことによつて資本主義の矛盾を解決 せ ね 真に正しい社会や文化を創造することが出来るように教育を改革せねばな (2)放任の資本主義から計劃経済へ」と進むこと、 しまねばならず、 一つはカ 次に又デュウイーの 1 Ø 所 他は教育の根本的な改革が必要なのである。即ち先ず「自 謂 新しい社会」 言う「人間性の可朔性—plasticity of impulse, を正しく認識し、 The new society 創造的知性を素直に伸長し 又は「経済の鞭から福祉 へと資本主義国 ばならな い Ø で 7 家 あ が

- の資料は富山中央児童相談所から得た。
- E.H.Carr, The new society
- J. Dewey, Human Nature and Conduct Part I, Section I-I

Щ